軽井沢シンフォニックコーラス
TUTTI 第 47 号
2024.08.09

遠い国物語 (16)「鐘と蝉と」

真崎 隆治（ バ ス ）

ヨーロッパときいてまず思い浮かぶ風景は、鐘の音がかなたの地平から聞こえてくる夕映えの野の風景であった。ヨーロッパなど見ず知らずの小学生のころからそうだったのだが、なぜかは分からない。本で読んだり、人から聞かされた覚えはない。繋がりがありそうなものはミレーの「落ち穂拾い」の絵に強い印象を受けたことぐらいだが、それもいつどこで見たのかの記憶がない。しかしミレーの絵ははっきり覚えている。絵だから音はない。そこに想像が鐘の音を持ち込んで、未知の世界の郷愁めいた風景をつくりあげていたとしか言いようがない。記憶の闇のなかをいくらさまよい歩いてもらちがあかないから、かつての僕にとってのヨーロッパは夕暮の野に聞こえるかすかな鐘の音であったと言うしかほかにない。

その鐘の音を今や実際に聞こうとしているのだ。心がたかまらないわけがない。フランスについてはじめに滞在したパリでももちろん鐘の音は聞いた。しかしそれは大都会の喧噪のなかでは街の騒音の一つでしかなかった。いいじゃないか。ストラスブールなら話は違うだろう。アルザスの野を伝わりくる鐘の音はしみじみと美しく僕を満たしてくれるはずだ。

ストラスブールでは学生寮の一室に泊まることができた。３階の端の狭い部屋だが、家賃が安いので助かる。隣接する建物はサン・トマ教会という歴史的に由緒ある教会だ。僕にあてがわれた部屋の横隣りが教会の建物であり、鐘楼は僕の部屋のすぐ脇といえるようなところにあった。これは鐘に憧れて来た者にとってなんと幸運なことだろうか・・・　だが、その時の僕は鐘をめぐる夢物語がここで終わりになるとは知る由もなかった。

寮の眼下には幅 15m ぐらいのイル川というライン河の支流が流れ、両岸は美しい並木の散歩道になっていて、見下ろしているだけで心が安まってくる。鐘も隣で鳴る。いいところに来たなあと感激にひたっていたそのとき、突如サン・トマ教会の夕べの鐘が鳴った。それは強烈な轟音だった。慣れてきてみればそこまでいうほどの凄さではないのだが、これから暮らす異国の地にほっとして安らいだ気分になった矢先なので、体が飛び上がるほどの衝撃を受けた。「カンカ〜ン、カンカ〜ン」と優しく心に染みいるどころか、「グゥラガーン、グゥアンガーン !!」と魂を引きずりまわすような音だったので、飛び上がるのも無理もなかろう。

フランスはカトリック教の国であるが、大雑把にいえば、ストラスブールは 16 世紀のころからカトリック教会に反発する、プロテスタント教会のフランスでの中心地となり、市内にはカトリック教会を押しのけるかのようにプロテスタントの教会が点在している。そして、カトリック／プロテスタントを問わず、各教会に鐘楼があり、それらが朝、昼、夕と時間にあわせ、行事にあわせ、なにかにつけて「本物の教会はここだよっ」と競い合うように鐘を鳴らす。すべての教会が一斉に鳴らすとまでは言わないまでも、あちこちから鐘が聞こえてくる。日本では想像できない風情だ。それと、日本の寺の鐘との大きな違いは、日本では「ゴ〜ン」と「ゴ〜ン」とのあいだに結構長い間があるが、ヨーロッパのは一度鳴りはじめるとしばらくは切れ目なく鳴り続ける。もう一ついえば、日本の鐘は一つの鐘楼に一つだが、ヨーロッパの鐘は団体で鳴るのが基本である。

欧米と日本の音楽の相違のなかに、鐘の数や鳴らし方と共通したところがあるように思える。バッハやモーツァルトにかぎらず、西洋の音楽は一つの楽章のあいだは音の流れが途切れることを知らず、メロディー線が終わっても、分散和音だの通奏低音だのといって、音が鳴り続ける。そうはいっても休止符はある。しかしその存在はしばしば切れ目のない音の持続を強調するための装置のように僕には感じられてしまう。まあこのあたりのことはずいぶん雑な言い方で失礼。

他方、日本の音楽には間が多く、その創り出す静けさや緊張感が何とも言えない深みを音楽に与える。ヨーロッパに来てみて、国々により音楽はちがうものだと改めて感じた。音楽はその国の言葉によって独特なものとしてうまれてくるということは以前から考えていたが、鐘の音にも本質的なものが現れているとまで

は思っていなかった。良い、悪い、ではない。そういうものなのだ。それにこれは、好き、嫌い、とはまた別の問題でもある。

２年半後に帰国した翌年の７月、思わぬ事から日本にも西洋の鐘と同じ現象があることを発見した。連れ合いの伯父の別荘が那須にあり、仕事を抱えて一ケ月ほど過ごさせていただいた時のことである。

話は飛ぶが、「ひぐらし」とか「カナカナ」と呼んでいる蝉がいる。夏はじめの夕方ごろ、遠くの林から「カナカナカナカナ」という美しいなかにも哀愁を誘う声が聞こえてくる。東京練馬の母の実家で小学校３年生のときに耳にしたのが最初だが、なんとすてきなんだろうと子ども心にも思った。それ以来「ひぐらし」の声を聞くのが楽しみになった。皆さんご存知のように軽井沢でも６月末あたりから夏が終わるまでのあいだ、いつも１匹だけ、姿も見せず、高い樹のなかでどことも知れず鳴いている。

さて、那須の家の庭の一部がこんもりした林になっていた。そこで毎日数百はいようかという沢山の蝉がギャーギャー鳴いていた。そのうるささといったらない。どんな奴だろうかと見に行き驚いた。図鑑で見覚えていた「ひぐらし」なのだ。まさに絶句した。ひぐらしの品位が急落した。これではただの蝉のなかでもとりわけ騒々しい奴ではないか。

ふと思いついてウィキペディアをひらいてみたら、《間近で聞く声はかなり大きく、遠くで聴く「もの悲しい印象」とは異なるともいう》とあった。「ともいう」どころではないことを僕はしっかり確認した。この際ついでに、この短い文章のなかで「聞く」「聴く」を使い分けているが、その意味があるのだろうか。日本語版ウィキペディアにはこうした不注意なことが時に目立ち、信頼性に欠けるところがある。それはどうでもいいとして、フランスで僕は鐘の音のすさまじさにあきれたのだが、その一方、本来自分勝手にいだいていた、夕べに野をこえて聞こえてくる美しく、静かで、哀愁さえこもっているとも言える鐘の音も、間近で耳にするとなんとも騒々しい。となれば「鐘の音もひぐらしの鳴き声も同じじゃん」てなことになるが、そうなると、近くで多数のものを聞くのと遠方で一つあるいは一匹で発する音の違いは、両者に共通していると言えるのだろうか。さてややこしくなってしまった。猛暑のなかで考えるのはここまでとしよう。

「暗闇で笛を吹くのは？誰」

岡田 弥生（ 大林 義博 ）

軽井沢町でも標高の一番低い、小さな別荘地に住むこと 10 年、様々な樹木に囲まれ、夜になると真っ暗になり、聞こえてくるのは小川の流れだけになります。

7 月のはじめ、夜明け頃と夜 9 時頃に何とも奇妙な声が林の暗闇の中から聞こえてきました。その声は「ピーーー、ショーン。ピーーー、ショーン」とリズムをもって、左の林の方で「ピーーー」、すると、これに答えるように右の林の方で「ショーン」、この繰り返しが何度も続きました。

薄気味の悪い日が何日か過ぎ、録音して、合唱団の先輩に聞いてもらいました。その正体はすぐに分かりました。「トラツグミという鳩くらいの鳥で、我が家ではピーションとよんでいる……」という答えでした。早速調べてみると、ツグミ科の鳥は全世界に分布していて約 300 種、昆虫や木の実を食べて生活し、鳴き声の美しいものが多く、「ウタツグミ」の名をもつ仲間もいます。しかし「トラツグミ（鵺）」の鳴き声は他のツグミと全く違って陰気で前述のように早朝や夜、曇天の日に繁殖期になると鳴き交わし、全身が黄色の虎模様であることから名付けられ、「 オニツグミ」とも言われているそうです。

さて、平安時代のこと、この声を聞くのは不吉の前触れであるといって、大事が起きないよう天皇や貴族は祈祷したという話もあり、平家物語には「不思議な声で鳴く得体の知れないもの」といわれ、これが「鵺」と言われるようになったのはずっと後のようです。当時は顔はサル、胴体はタヌキ、手足はトラ、尻尾はヘビという怪獣（妖怪）と考えられ、源頼政が山鳥の尾羽根で作った先端にヤジリのついた尖り矢で見事射止め、その鵺を葬ったとされる塚が今でも残っています。この「鵺」の主がトラツグミという鳥であると分かったのは、江戸時代であったので、長い長い年月の間、人々に不安や疑問を与え続けていたと思うと驚きです。それにしても射止めた妖怪は何だったのでしょうか？

「このトラツグミ、現在でも 20～30 年単位で時々話題になり、UFO だとか、軽井沢でもある女子大の寮の周囲で夜中に口笛を吹いている不謹慎な者がいると通報があり警官が出動したという話、またサスペンスドラマにも登場。『知っていればしみじみと聞くこともできますが、女性一人では耐えられないかも知れない』」とは先輩の話でした。



★トラツグミについて調べていったら平安時代の鵺にまで話が深堀りされていった、というあたりで、これを書いたのが岡田ではなくて大林さんだということは明らかになりますね。暗闇の中で不気味な声を録音して大林さんに聞いてもらい、声の正体を教えていただいただけでなく原稿まで書いていただいた自分を「よくやった」とほめてやりたいと思います。この声に覚えのない方はぜひ、インターネットで「トラツグミの鳴き声」で検索を。

「 分か去れ で生かされて 」

白枝 庸介（ バ ス ）

３月８日朝、突然 胸の激痛と息苦しさに襲われ 119 番したのですが、「軽井沢の２台も御代田の１台も出払っており、御代田消防署の “緊急車両” が向います」とのこと。気が遠くなるほど待たされて、やっと運ばれた車内は無味乾燥なワンボックス。そこが大賀ホール横の広い芝生公園だったので「ドクターヘリがココに来てくれれば速いのに！」と思いつつも、救急隊員殿が症状を聴いた後は絶え間なく声がけしてくるので、こちらも苦痛を紛らわすために いちいち答えたり、どこを走行中かを聞いたりしていました。また、途中から乗り込んできた医師には『心筋梗塞でしょうか？』と問うたりもしましたが、『かもしれません』と実にそっけない返事。最初の段階で胸に加えて背中の痛みも告げたことで、その医師も佐久医療センターも既に “大動脈解離” の疑いをもっていたのかもしれません。そして、救急入口でストレッチャーに移されたところで 記憶が無くなりました。

助かった今だから言えますが、車内の装備に興味があった “救急車” に乗り損なったのが残念でなりません。もちろん、二度と運ばれる気はありませんが。

診断書によれば、救急救命時と翌未明の容体急変時に、心臓血管外科チームと消化器外科チームが（おそらくリレー形式で）２回執刀され、その後各科１回、合計４回の手術と３ケ月間の闘病でしたが、優秀な医師と献身的な看護師、そして妻の支えと子供らの励ましによって無事に退院できました。血流障害によっていくつかの臓器の部分や片方を失い、体重は十キロ減、筋肉は三割減、体力は半減したものの、帰宅後は妻特製の“高カロリー食”のおかげでグングンと回復した結果、一ケ月後にはコーラスの練習にも復帰できました。

当初に不安だった腹部の変調も無く、退院二週目には毎日一万歩の Alkinist に戻り、いつの間にか、早い回復が当然のように感じていましたが、練習復帰の翌々日に、無理を重ねた反動と増えた薬の副作用から、いきなり体調不良に見舞われました。 そこで、救急から退院までの手術、治療の経緯や ICU での容体などを記録と記憶で振り返り、そもそも 落命の可能性 もあったことを再確認したとき、或る 直感 が下りてきました。

それは、今回、 大いなる何か によって救われた、という感覚。 むしろ発症は寿命を延ばすための生活矯正の伝えだった、という解釈。また、“ 分か去れ ” にあって、生かされたのだから、その時間を人生仕上げの充実に活かすべきだ、という想い などです。そして、これらは人生で初めての 感得 といえるものでした。

今は、以前の身体に戻す、という意識を改め、腎臓負担を抑えた“ かしこい食 ” に切り替えて、ゆっくり養生に勤しんでいます。 発病の原因になった過去を悔いてもしようがないし、傷んだ身体の未来を憂いてもはじまらない。旧中山道の完歩を夢に見つつ、当面、五千歩 Alkinist の復活を目標に、シンフォで歌うことと皆さんとの交流を励みに 今 を大切にしていこうと思っています。

ご心配をおかけしました。お気にかけていただき、ありがとうございました。

退院二ケ月目の７月末 記

追伸。 今日の診察で、予ねて手術で切断され、力が入らなくなっていた腹筋を縫合し補強する手術をすることになりましたが、この不具合の解消は、コーラスにも Alkinist にも好都合なので歓迎しました。８月下旬の事前検査で執刀可否の判断に併せ日程決めをしますが、一週間の入院が敬老会のステージに影響しないことを今から祈るばかりです。 なにしろ“前科”がありますから・・・

【編集後記】

★お待ちかね「遠い国物語」の「鐘と蝉と」 練習日に目で催促し、申し訳ないなと思いながらもメールでも「どうですか」と催促し続けて書いて頂いたこの原稿を頂いた時は、「待ったかいがあった！」と小躍りしました。でもまだ終わりではありませんので、みなさんも「続きが読みたい」と真﨑さんに熱い視線をお送りくださいますよう、お願いいたします。

★書いていただきたいなあと思いつつも遠慮してお願いせずにいた白枝さんのお話し。ほんとうに奇跡のような御体験。山に空に花に草に感謝したいです。（岡田）